テキスト『社会安全学入門』の刊行

先週、本学部が3年かけて取り組んできたテキスト『社会安全学入門』（ミネルヴァ書房刊）の念稿を終えた。本誌が皆様のお手元に届くころには、同書が全国の書店の店頭に並んでいることと思う。

関西大学社会安全学部・大学院社会安全研究科が、足掛け5年の準備期間を経て開設されたのは、2010年4月のことである。発足にあたって、安全・安心を探求する新しい学として、社会安全学を提唱した。当時、わが国には778の4年制大学が存在していたが、安全・安心の諸問題に真正面から取り組む学部・大学院の前例はなく、本学が全国に先駆けた初めてのものであった。

学部発足（定員250名、2014年に275名に変更）と同時に、大学院社会安全研究科修士課程（定員15名）もスタートした。その後、修士課程の完成をまって2012年4月に博士課程後期課程（定員5名）が開設された。これに伴い、修士課程は博士課程前期課程に名称変更された。それから8年が経過し、996名の学部卒業生、66名の修士修了生、8名の課程博士取得者を社会に送り出している（2017年10月現在）。

当初、学部の英語表記はFaculty of Safety Sciencesとしていた。しかし、2016年4月から、より社会安全学というニュアンスを意識してFaculty of Societal Safety Sciencesという表記を用いている（大学院はSchool of Societal Safety Sciences）。ちなみに、Societal Safetyという用語は、北欧諸国においてすでに使用されている。

ところで、2009年5月に新学部・大学院の設置を文部科学省へ認可申請した際、学部と研究科において精力的な研究活動を推進することで、近い将来、社会安全学という学問体系構築への道筋をつけたいとしていた。一つの学問体系がまがりなりにも成立するには、まず、専門家による十分な研究の蓄積が必要である。と同時に、研究の蓄積を踏まえた、網羅的かつ体系的なテキスト（教科書）が刊行される必要がある。

それを実現するために、本学は2015年4月に6名の委員からなる編集委員会を立ち上げた。そして、約半年をかけてテキストのコンテンツを検討し、2016年4月からは月2回のペースで共同研究を始めた。その成果を取りまとめたものが冒頭に紹介した『社会安全学入門』である。これにより、開設時の文部科学省ひいては社会への公約を果たすことができるものと考えている。

2017年度の学部の事業として、もう一つ特筆すべきことがある。Elsevier/Butterworth-Heinemann社から、The Fukushima and Tohoku Disaster: A Review of the Five-Year Reconstruction Effortsを公刊したことである。同書は、2016年3月にミネルヴァ書房から出版した『東日本大震災　復興5年の検証』の英語版である。本学部はこれまで、学部編の和書の研究書を5冊刊行しているが、英語本の刊行は初めてである。

先の『社会安全学入門』も来春に英語版を刊行すべく、現在、準備を進めている。社会安全学は、関西大学が世界に先駆けて提唱した安全・安心社会を創るための新しい学知である。The Fukushima and Tohoku Disasterと併せて、二つの英語版著作が国際的にも多数の読者を得ることができることを切に望んでいる。

2018年2月

関西大学社会安全学部長・
大学院社会安全研究科長
安　部　　誠　治